嬉しいこと、悲しいこと、今は先の読めない「マサカの時代」

―人生は「マサカの覚悟」と「究極の選択」が鍵となる！―

本誌編集長 佐藤 公（さとう たかし）

（2024年冬将軍号）

2025（令和7）年、21世紀になって早くも四半世紀、昭和100年となったが、今の時代は先の読めない「マサカの時代」である。

「もちろんいつの時代も『マサカ』という出来事は起こる。しかし、今の時代はそれが非常にドラマチックな形で、目の前に迫ってきているという実感がある。『マサカ』の上に『マサカ』と続く時代だ」（五木寛之著、「マサカの時代」、新潮新書）

また、瀬戸内寂聴（1922年～2021年）の名言にも「人生は本当に山あり谷あり。坂もいっぱいありますが、その中にマサカという坂があります。私たちはある日突然に、そのマサカに行き当たる。『まさか！』ということが起きるんです」とある。

世界情勢も日本社会も、個人の人生においても、予期せぬ出来事はいつでも起きる。

石川県では、24年元旦に発生した大規模な能登半島地震、同年9月の豪雨、さらに同年11月の最大震度5弱の地震が再度発生し被害を大きくした。日本国民だれしも「マサカ」と思った自然災害の連鎖である。

また、2024年10月に行われた衆議院選挙は小選挙区と比例代表を合わせた465議席の配分で与党、自民・公明両党は、過半数の233議席を下回ったことだ。そして国民民主党は、選挙前の4倍の28議席を確保したことも「マサカ」であったが、これは期待の高い「マサカ」と言えるだろう。

海外でも「マサカ」の報道で世界を驚かせた。

12月3日、韓国ユン・ソンニョル（尹錫悦）大統領による「非常戒厳」の宣布だ。これを受けて国民の大勢が国会議事堂の周りに集まり、戒厳令に抗議。国会は素早く、解除の要求を議決した。このため大統領は4日朝、戒厳令を解除すると表明。あまりに突然の出来事に、国民はあっけにとられた「マサカ」の戒厳令だった。では、社会ではどうか。

2024年のノーベル平和賞に、被爆者の立場から核兵器廃絶を訴えてきた日本被団協＝日本原水爆被害者団体協議会が受賞したことは嬉しい、思わぬ「マサカ」であった。

「ロシアによるウクライナ侵攻」や「イスラエルとパレスチナ戦争」など、世界でなぜこうも「マサカ」の戦争が頻発するのか。それは〝人間は歴史に学ばない〟からだという。

さらに、五木寛之は同書のなかで「今は、AIやITなどの急激な進化や、技術革新による変革が未来社会に及ぼす影響が読めないまさに、『マサカの時代』。

つまり、どんなことが起ころうと覚悟を決めるということである。覚悟を決めるということは、生きている限り、己の人間力を磨き続け、少しでも善き人間となること」と生涯、人間力の研鑽が大切と説くのである。

一方、「2つの扉……「まさかの時代」を生きる究極の選択」（高橋 佳子著、三宝出版）では、「究極の選択」が鍵を握るという。

「どんな時代に生きようとも、人間にとって、逃れることのできない究極の選択があります。今日、人々は、その選択をほとんど意識していないかもしれません。それは、ある意味で『忘れ去られた選択』とも言えるものです。その究極の選択とはいかなるものなのか。そして、その選択の向こうに広がる世界をどう生きてゆけばよいのか」を解説している。

占星術の言葉で2020年末に財力や権力が重視された「地の時代」が終わり、情報や知性が大切にされる「風の時代」に入り、時代の大きな転換期だと言われている。心の豊かさや個性、自分の体験や知識といった、目に見えないものの価値が高まることが風の時代の特徴という。「情報や知識、才能、人脈がキーを握る時代」なのである。

つまり、これまでも、そしてこれからも、何が起こるかわからない、何が起こっても不思議ではない「マサカ」の世界を生きてゆく覚悟と選択が不可欠ということである。

「人間は歴史に学ばない」という「マサカ」の世界紛争頻発！